Alicelan

旅する妖精(ようせい)たち

有間カオル

絵＝飯田愛

旅する妖精たち

有間カオル
絵＝飯田愛

Alicekan

※ もくじ ※

5 …… プロローグ

12 …… 第1話 フカフカの絨毯 ～苔～

38 …… 第2話 森の女王 ～ブナの木～

60 …… 第3話 猫を酔わせたり、薬になったり ～マタタビ～

78 …… 第4話 世界中で愛される花 ～カーネーション～

96 …… 第5話 月明かりのもとで咲く花 ～月下美人～

116 …… 第6話 きらめく宝石の葉 ～多肉植物～

136 …… 第7話 太陽の花 ～ヒマワリ～

156 …… 第8話 百年目の開花 ～竹～

184 …… エピローグ

Alicekan

プロローグ

深い底に沈む倒木や岩がはっきり見える透明な湖に、太陽の光が白い矢のように降り注いだ朝。

春のあたたかい風が湖の上を走っていくと、たくさんの波が生まれ、波はたくさんの泡を作ります。

ひときわ大きな銀色の泡が水面を転がりプチンと弾け、中から光を映した鏡のように輝く髪と体を持った妖精が生まれました。

生まれたばかりの妖精は、半透明のまだ頼りない羽で湖から飛び立とうとしまし

Alicekan

たが、波に足をすくわれて水面に倒れ込んでしまいました。
生まれたばかりで、うまく羽を動かすことができないのでしょう。しかたなく、妖精はそのまま水の上でたゆたいながら、大きな青い空をぼんやりとながめることにしました。
風がどこからか、甘い花の香りを運んできました。次にみずみずしい若葉の香りが流れてきます。
妖精の鼻がピクピクと動いて、半透明の羽が水中でプルプルと震えました。植物の香りをかぐたびに、頭の中にポコン、ポコンと水底から上がる泡のように、いくつかの言葉が浮かんできます。
光、水、土、緑、探す、見つける……。
自分はなにものなんだろう。なんでここにいるのだろう。これからどうすればよいのだろう。

妖精の目にうっすらと涙が浮かんできました。
どうしていいのかわからないだけではなく、なんだか胸の奥がとてもさびしく感じるのです。なにかをすくい取られて、大きな穴が空いてしまったように、とても不安になるのです。
妖精の足に、コツンと水ではないなにかが触れました。なにかの葉でした。厚みがあって、つややかな深い緑色の大きな葉です。妖精は葉の上によじ登りました。まるでボートのように、妖精を乗せて波に揺られながら進んでいきます。
太陽の光が髪や羽に降り注ぎ、気持ちよくて少しだけ元気が出ました。
葉の端に手をかけて、そっと水面をのぞき込むと、自分の姿が映っています。
「まぶしい……」
髪も瞳もガラスのように、キラキラと輝いています。
「……キララ」
頭の中でシャボン玉がパチンと弾けたように、名前が浮かびました。

Aicekan

「ボク、ボクはキララ。きっと、そうだ。ボクの名前はキララだ」
乾いて軽くなった羽を大きく広げます。
生まれたばかりの妖精、キララはコロンと寝転がりました。葉は木から落ちたばかりなのか、みずみずしくて青い香りがします。なぜか、なつかしく思う香りです。
その香りをかいでいると、頭の中で散らかっていた言葉が、ゆっくりと近寄って、少しずつつながっていくのを感じます。
光、水、土、緑、探す、見つける……。
ジグソーパズルのピースがつながって、じょじょに絵があらわれていくように、自分自身のことがわかりかけてきました。世界を描く地図が、頭の中に浮かんできた気がします。
「ボクのさびしい部分には、パートナーとなる植物の魂が必要なんだ」
キララは自分の正体を知りました。光と水から生まれたキララは、光と水で育つ植物の妖精なのです。

植物の妖精たちは、生涯を共にする植物を見つけ、永遠の約束を交わしてお互いに守り守られて生きていくのです。
「探さなきゃ。ボクと永遠の約束を交わしてくれる植物を」
キララは起き上がり、優しく葉をなでます。
「キミにも、約束を交わした妖精はいたのかな？」
キララは周りを見回します。水の上には植物なんてありません。
湖の果てに森が見えますが、小さな妖精にとってはあまりにも遠い距離です。薄い羽では、休みなく湖の上を飛んでいくのは不可能です。
今吹いているそよ風では、葉の舟はほとんど進みません。かといって、強風では、キララが飛ばされてしまうかもしれません。
植物と出会えるのかという不安、ひとりぼっちのさびしさ。キララはギュッと、ひざを抱えました。
湖の静けさが、キララの心をますます押しつぶしていきます。ふたたび目に涙が

AI cekan

たまってきました。

ポロン、と一粒の涙がひざに落ちたとき、キララの耳に陽気な歌声が流れてきました。

驚いて歌声のするほうへ顔を向けると、白い水鳥が水面を滑るように近づいてきます。

「キミが歌っていたの？」

水鳥に話しかけると、「ちがう、アタシ」と、さきほどの声がしました。鳥のくちばしは動いていません。

不思議だな、と首をかしげていると、鳥の背中から、太陽のような金色の髪をした妖精が、ぴょこっと顔を出しました。短くてツンツン立っている髪の毛は、本当に太陽のようです。

はじめて見る自分以外の妖精の姿に、キララは目をしばたきます。なにも言えずに固まっていると、別の声がしました。

「ひとりなの？」

今度は金髪の妖精の背後から、赤とオレンジの長い髪を、炎のように揺らしている妖精が現れました。

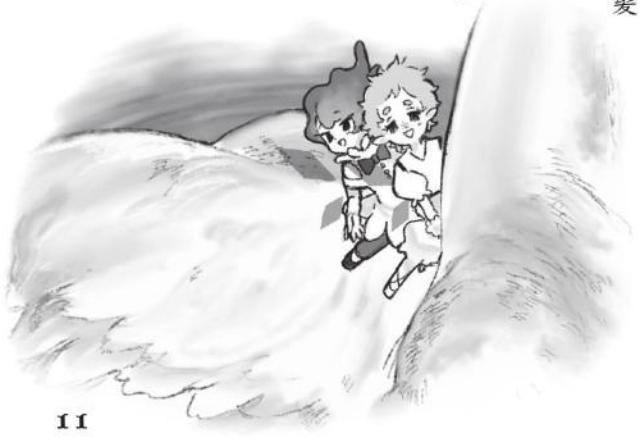
ドキドキしながら、キララは答えます。

「うん。それにボクはたった今、生まれたばかりなの」

「そうなんだ。一緒に、旅をしない？」

赤髪の妖精がキララに向かって手を伸ばしました。

キララの旅が始まります。



Alicekan